

# 転校経験の影響に関する心理学的研究

## －自己効力感とソーシャルスキルの観点からの分析－

原 田 純 治\*・山 城 健\*\*

The Psychological Study of the Influence of Transfer of Schools:  
From the View Points of Self-Efficacy and Social Skills

Junji HARADA Ken YAMASHIRO

### 目 的

自らが転校生として学校が変わる経験をした人はそれほど多くはないだろう。しかし、転校生を迎え入れることは、多くの人が経験したことのあることと考えられる。教師も、自分自身の転校経験がある人は少ないだろうが、過去において、そして将来において転校生を迎え入れる経験に遭遇しないことはないだろう。その時、転校生が少しでも早くその学校に馴染めるように受け入れること、環境を整えることが重要である。転校生の心情に寄り添い、理解することが必要であると考えられる。

小泉・浅川・内藤・古川（1984）によれば、転校は、入学・留学・移住のような危機的環境移行事態の一形態であり、こうした事態に直面した個人は、対人交流が不活発となることが明らかにされている。

また、高橋・小関・小関（2014）は、転校などの環境変化は重要なストレスのひとつであるとされており、転校児童生徒（以下、転校生）の心理社会的適応を支援するためには、転校生を受け入れる学校側の支援体制の整備が重要課題となる、と指摘している。これらの見解より、転校生は少なくとも環境の変化に伴うストレスを感じていることが考えられる。また、そのストレスによって、対人関係において不安を抱えていることも考えられるため、学校全体の支援が必要である。

転校生に対してどのような関わり、支援していくことが必要になるのだろうか。支援の在り方を考える前提として、転校は新しい環境に適応するのに必要なメンタリティと考えられる自己効力感や対人関係を円滑に進めていく上で必要なソーシャルスキルなどの社会性と関連性があるのか、あるとすればどのような関連性があるのかを明らかにする必要がある。本研究では、大学生を対象に、過去の児童生徒であった時期の転校経験が彼らの自己効力感とソーシャルスキルとどのような関連があるのかについて探索的に研究を行う。

---

\*長崎大学教育学部 \*\*長崎大学教育学部平成26年度卒業生

## 方 法

### 調査協力者

大学生を対象に平成26年11月から12月の期間に質問紙を配布し、有効な回答が得られた100名(男性33名, 女性67名)を分析の対象とした。

### 質問紙の構成

**参加者の性別** 基本的な属性として性別の記入を求めた。

**転校経験** (1)転校経験の有無, (2)転校経験ありの場合, 小学生・中学生・高校生の時期ごとに転校の回数と転校前後の所属していた学年のクラス数の回答を求めた。

**特性的自己効力感** 成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)の尺度を用いた。本尺度は, Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers(1982)が作成した自己効力感尺度の邦訳版である。原尺度は, ①「行動を起こす意志」, ②「行動を完了しようと努力する意志」, ③「逆境における忍耐」などから構成されている。この尺度の質問項目数は23であるが, 因子負荷量が0.40未満の項目5項目を除き18項目を採用した。

また, この尺度は5件法であるが, 「どちらともいえない」の回答を避けるために, 本研究においては, 「まったくあてはまらない(1点)」, 「ほとんどあてはまらない(2点)」, 「あまりあてはまらない(3点)」, 「ややあてはまる(4点)」, 「わりとあてはまる(5点)」, 「非常にあてはまる(6点)」の6件法で回答を求めた。

**ソーシャルスキル** 南川(2006)の「標的スキル選定のためのソーシャルスキル自己評定尺度」を用いた。

質問項目数は24項目で, 「ルール遵守」「聴く」「基本的な声かけ」「配慮」「主張」「誘う・入る」そして「トラブル解決」の7つの下位尺度から構成されている。各下位尺度の質問項目例を以下に示す。「ルール遵守」スキル(友達との約束を守る, などの3項目), 「聴く」スキル(友達が話しやすいようにしながら話を聞く, などの2項目), 「基本的な声かけ」スキル(友達にいつもあいさつをする, などの4項目), 「配慮のスキル」(友達の様子から友達の気持ちを考える, などの6項目), 「主張スキル」(友達でも無理なお願いは断る, などの4項目), 「誘う・入る」スキル(仲間に入りたそうにしている人がいたら誘う, などの3項目), そして「トラブル解決スキル」(友達から悪く言われたときにカッとしなない, などの2項目)。回答者には, 各質問項目に「まったくあてはまらない(1点)」, 「ほとんどあてはまらない(2点)」, 「あまりあてはまらない(3点)」, 「ややあてはまる(4点)」, 「わりとあてはまる(5点)」, 「非常にあてはまる(6点)」の6件法で回答を求めた。

## 結 果

**転校経験** 転校経験のない者は38人, 転校経験のある者は62人であった。また, すべての回答者が高校生の時期の転校経験はなかったため, 転校ありの者の転校回数は小学生と中学生のときの転校回数の合計によって求めた。

### 転校経験と特性的自己効力感の関連

特性的自己効力感得点に関し、転校経験と回答者の性別を要因とする分散分析を行った。転校経験の要因については、「転校経験なし群」、転校回数の平均値(1.5回)を基準に転校経験が1回の「転校経験あり・少群」、転校経験が2回以上の「転校経験あり・多群」の3群に分けた。

分散分析の結果、回答者の性別の主効果 ( $F_{(1,94)}=6.21, p<.05$ ) と転校経験要因と性別との交互作用 ( $F_{(2,94)}=3.38, p<.05$ ) が有意であった。性別の主効果は、女性の方が男性より特性的自己効力感得点が高いことを示すものであった。また、交互作用に関する下位検定の結果、「転校経験なし群」、および「転校経験あり・少群」では、男女間に有意な差は見出されず、「転校経験あり・多群」において、男性に比べ、女性の特性的自己効力感得点が高いことが見出された(図1)。

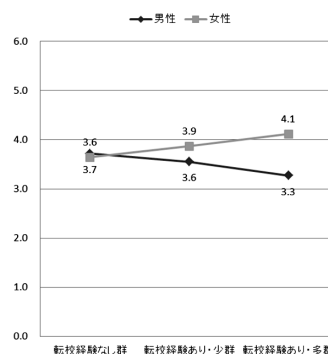


図1 特性的自己効力感

### 転校経験とソーシャルスキルの関連

転校経験なし群、転校経験あり・少群、転校経験あり・多群の7つのソーシャルスキル得点を男女別に示す(表1)。

表1 転校経験各群におけるソーシャル・スキル得点

	ルール遵守 スキル	聴く スキル	基本的な 声かけスキル	配慮の スキル	主張 スキル	誘う・入る スキル	トラブル解決 スキル	
転校経験なし	男性	4.38	4.54	4.11	4.49	4.30	4.19	3.71
	女性	5.02	5.02	4.70	4.97	4.54	4.47	3.76
転校経験・少	男性	4.93	4.70	4.25	4.48	4.21	4.50	3.75
	女性	5.21	5.04	5.17	5.18	4.48	4.78	3.77
転校経験・多	男性	5.00	4.80	4.48	4.44	4.96	4.28	3.70
	女性	4.97	5.30	4.90	4.88	4.62	4.27	3.65

転校経験と回答者の性別を要因とする分散分析を、7つのソーシャルスキル下位尺度ごとに行った。その結果、「ルール遵守のスキル」「聴くスキル」「基本的な声かけスキル」「配慮のスキル」では、女性の方が男性より得点の高いことが見出された( $F_{(1,94)}=4.06, p<.05$ ;  $F_{(1,94)}=6.10, p<.05$ ;  $F_{(1,94)}=12.32, p<.01$ ;  $F_{(1,94)}=11.46, p<.01$ ) が、転校経験の要因の主効果及び転校経験と性別との交互作用はいずれも有意ではなかった。「誘う・入るスキル」「トラブル解決スキル」では、いずれの要因の主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

唯一「主張スキル」に関しては、転校経験の主効果

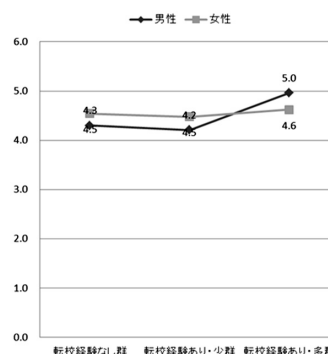


図2 主張性スキル得点

が有意な傾向にあった( $F_{(2,94)} = 2.42, p < .10$ )。多重比較の結果、転校経験あり・少群(4.34)に比べ、転校経験あり・多群(4.79)の方が高いことが見出された。

## 考 察

### 転校経験と特性的自己効力感の関連について

特性的自己効力感に関しては、転校経験と性別の間に有意な交互作用が見出された。「転校経験なし群」と「転校経験あり・少群」では、男女間に差はなく、「転校経験あり・多群」で女性の特性的自己効力感の得点が男性のそれより高いことが見出された。

図1で、男女別に自己効力感の増減の傾向を見ると、男性では「転校経験なし群」から「転校経験あり・多群」に至るまで一貫して自己効力感は減少の傾向にあることが読み取れる。それに対して、女性では男性の傾向とは逆に、一貫して上昇する傾向を読み取ることができる。「転校経験あり・少群」では、男性の自己効力感「転校経験なし群」よりも低下し、女性の自己効力感が上昇したため、男女の間に多少の差が窺われるが、有意差は見出されなかった。しかし、「転校経験あり・多群」では、男性の自己効力感が「転校経験あり・少群」の男性よりさらに低下し、反対に、女性の自己効力感「転校経験あり・少群」の女性よりさらに上昇したため、「転校経験あり・多群」の男女間では、有意差が生じた。

この結果から、転校回数が「なし」から「あり」へ、さらには転校経験が増すにつれて、男性は女性に比べて特性的自己効力感が低下しやすく、転校先の新しい環境に適応する力が低下していくことが推察される。一方、女性は転校経験が「なし」から「あり」へ、さらには転校の回数が増えるにつれて特性的自己効力感が高まり、新しい環境への適応に自信を増加させる傾向があることが推察される。

男性は転校によって変化する環境、新たな人間関係をストレスと感じるのに対し、女性は転校による環境の変化に対処する経験から自己効力感を高めていくのかも知れない。この結果が一般的であるならば、教師・学校は男子の転校生への目配りが必要となってくると言えるだろう。

### 転校経験とソーシャルスキルの関連性

転校経験はその有無、その経験の増加がソーシャルスキルの獲得や習熟と関連すると考え、それらの間の関連性について検討を加えた。ソーシャルスキルは、「ルール遵守」、「聴くスキル」、「基本的な声かけ」、「配慮のスキル」、「主張スキル」、「誘う・入る」、「トラブル解決スキル」の7つの種類別に分散分析を行った。

その結果、「ルール遵守」、「聴くスキル」、「基本的な声かけ」、「配慮のスキル」の4つのスキルに関しては、女性が男性よりも得点が高いという性別の主効果に有意差が見出されたが、転校経験の主効果には有意な差は見出されず、両要因間の交互作用も有意ではなかった。また、「誘う・入る」、「トラブル解決スキル」の2つのスキルでは、いずれの主効果も交互作用も有意な差は見出されなかった。唯一「主張スキル」において転校経験の主効果が有意であった。多重比較からは、「転校経験なし群」と「転校経験あり・少群」間には有意な差は見出されなかったが、「転校経験あり・多群」は「転校経験あり・少群」に比べ主張性スキルの高いことが見出された。

転校経験の有無・転校回数が関連しているのは「主張スキル」においてのみであった。その他のスキルでは、男性に比べ、女性の方が一貫して高かった。また、転校経験がある人で、特に2回以上転校を経験したことがある人は、ソーシャルスキルの中でも「主張スキル」が優れていた。転校先での新しい環境、特に対人的環境の変化に対処するにはまず自己を「主張」するスキルが必要であり、その獲得・習熟がなされるのかも知れない。この点については今後の詳細な検討が必要である。

### 総合考察

本研究においては、転校経験が自己効力感とソーシャルスキルに及ぼす影響について検討を加えた。

転校経験の自己効力感に与える影響の方向性が男女間で異なっていることが見出された。女性では転校経験によって自己効力感が高くなるのに対し、男性では転校経験によって自己効力感が次第に低下していく傾向が窺われた。男子の転校生にはより配慮が必要であることが示唆された。

下田・荻野・岡本(2013)は、調査対象者に転校経験に関する自由記述を求めるなどの方法を用い、「人は過去に経験した危機を振り返ったとき、そこにどのような意味を付与し、転機として語るか」に関する研究を行っている。本研究では、転校経験の有無と回数を尋ねた後に、自己効力感とソーシャルスキルの自己評定を求めた。本研究の調査協力者も、転校経験を振り返り、その経験が現在の自己の人となりになどどのような影響を与えたかを意味づけしたとすれば、転校を男性は危機(crisis)として捉え、女性は転機(turning point)として捉えたと言えるかもしれない。

調査協力者に、転校経験者はそれほど多くはない。今後は転校経験者のデータを最大限収集し、今回は分析できなかった転校前後の学校規模の影響などについて検討を加えていくことが課題として残された。

### 引用文献

- 小泉令三・浅川潔司・内藤勇次・古川雅文(1984). 転校生の新教育環境への適応に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 26, 392-393.
- 南川果南(2006). 学校で行うソーシャルスキル教育の授業の進め方—中学生の実態に合わせた50分授業— 相川 充・佐藤正二編「実践! ソーシャルスキル教育 中学校—対人関係能力を育てる授業の最前線—」(pp. 32-41) 図書文化社
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子(1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, 43, 306-314.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W.(1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- 下田千尋・荻野美佐子・岡本祐子(2013). 大学生の過去の転校経験に対する意味づけ—

転機としての環境移行― 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 12, 61-76.

高橋 史・小関俊祐・小関真実 (2014). 児童に対する社会的スキル訓練による転校生受け入れに関する自己効力感向上効果 ストレス科学研究, 29, 77-83.